

マスクング審査 vs. 公開審査

新しい科研費「新学術領域研究」の研究課題提案型では、応募者の氏名や業績に関する情報を審査員に伏せて審査を行う、いわゆるマスクング(覆面)審査が始まる。マスクングされるのは予備審査だけで、その後は通常通り、業績や準備状況などが問われるようだが、新しい試みでどのような研究が採択されるのか興味あるところだ。申請書の様式を見ると、必要があれば「研究分担者①」、「A機関」と書くように、となっているのが新鮮だ(どうでもよいが、なぜ分担者Aでないのだろう。容疑者Aなどが頭にあるから? イニシアルと取られるからか)。

折しも、レビューをたまたに依頼されているジャーナルから審査制度に関するアンケートが舞い込んだので進めていくと、今後の可能性として double blind review (つまりは、マスクング審査)についてどう思うか、という問いがあった。さまざまなジャーナルでマスクング審査が始まっていくことになるかもしれない(その流れとして、出版後の著者名まで著者A、著者Bとでもなったらどうだろう。研究者の意欲の源がそがれるのは必定なので、サイエンスの振興には逆行するだろうが)。

実際には(特に投稿論文では)、イントロダクションや実験方法

などを読めば誰が行ったのかはすぐにわかるような気もする。それでも個人的にはマスクング審査はいいのではないかと期待している。理由は諸々のバイアスが少しは減って、ダメなときでも納得がいきやすいのではなからうか、と思うからである。

その一方で、論文をウェブ上で公開して審査する試み

(Natureで以前行っていたが既に終了)、さらには、ピアレビューすらないオンラインジャーナルが始まっている。何もかもオープンにしてしまう流れである。生物系ではPLoS ONEやNatureグループによるNature Precedingsなどが既に始まっているが、いずれもオンライン出版後にコメントやフィードバックが付いていってWeb2.0的な流れを汲んでいるようだ。良質な論文がどのくらい集まって、耳目を引いてコメントなどを集められるかが鍵かもしれない。

現在の匿名レビュー制度は残るだろうが、10年後、20年後にどのような形で存続しているのだろう。現状では思いも付かないサイエンスの仕組みができあがっていく現場にいるのではないかと思う。

(田口 英樹)

